

石井充「白痴」論：「白痴」という戦略

河内，重雄
九州大学大学院人文科学府博士後期課程二年

<https://doi.org/10.15017/8498>

出版情報：九大日文．7，pp.49-72，2006-04-30．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

石井充「白痴」論

——「白痴」という戦略——

河内 重雄

当時の人間観及び「白痴」観を確認し、農本主義言説を整理すること、この作品における「白痴」表象、さらには「白痴者」を人間として描く戦略性）を考える。

二人間観及び「白痴」観

脇田良吉（一八七五—一九四八）は、「異常児」（「低能児」・「白痴児」・「精神異常児」・「悪癖児」等の総称）教育で有名で、数々の著作を残している。『異常児教育の実際』（大正四年六月 金港堂）は、その著作の一つだが、その中で脇田は、「不幸な子供」を持つ親から送られてきた手紙を紹介している。以下はその手紙の一部分の引用である（本文中の「○○」には、もとはその「不幸な子供」の名前が入っていたと思われる。以下、引用文中の傍線は全て筆者によるもので、旧漢字は適宜、新漢字に改めてある）。

一 本稿の狙い

石井充（生没年未詳）「白痴」（『文芸行動 第四号』大正十五年四月）は、医科大学の三年生の時に「運命的な、重い脳病に犯され」、田舎に連れ戻された主人公「謙介」の、田舎での百姓生活を描いた小説である。日々の農作業に歎きを感じ、飾ることを知らない謙介と、そのような謙介に対し無理解な周囲（家族や他の百姓）を描いた小説である。マイナーな作品なので、小説全文を巻末に資料として掲載した。

この小説では、「白痴」は単なる障害者の表象としてだけでなく、特定の歴史的状況と結び付けて戦略的に用いられている。作家が「白痴」を表象として様々なパターンで用いていく、その一つの例と言ってもよいが、石井充「白痴」では、（大正末から昭和にかけての農本主義的農民像を極端にしたもの）として「白痴」を描いていると考えられる。それは同時に、「白痴」こそが真の人間という、「白痴者」を社会の異物ではなく尊厳ある人間として描く戦略をも内包している。以下、大正

何卒く○○人となるのならんの境に付やさしき耳もて御聞き入是非とも御許下され御目にかゝり委しき事は可申上候へ共兎に角一寸以前御相談申上候（中略）都門の学校に入学致させ候上は随分学資も費し申事とは存候へども○○事更に見込無き白痴者と認め候へば私もいさぎよく断念致し何も彼も前世よりの因縁と諦め天に任せ申候へども教育次第にては人となる見込あるものを親の義務として此儘捨置くに忍び不申もうく私は○○さゝ人と
なり候へば我身は犠牲にしても少しも厭ひ不申候

本書の最後（余論）では、「最後に書き残しておきたい事は、我々御互は宇宙の一分子であつて、異常児も普通児も皆無関係のものではありません、我々には変態児も、中間児も、普通児も皆靈的には親戚であります。」といった、「白痴者」も同じ人間だ」とする見方を提示してはいるが、全体としてはこの手紙に見られるような、「白痴者」は人間ではないのではないかとするまなざしで満たされている。例えば、「それで大體の方針は前にも述べたやうに普通児の教授と変はらぬが、先づ出來得るだけ人にするといふの主目的にして、教科は讀書、算術を中心学科として、其他の手工、唱歌、図画、遊戯、運動等は以上三科目教授の準備として予習として課したまでにすぎなかつたのである。」といった記述は、その典型であろう。

このような、「白痴者」は人間か否か」といった問いとの関係で考え、まなざすことは、何も脇田だけが特別に行なつたことではない。こういったことは、近代に入つてなされた諸概念や諸価値の再編成に伴い、人間観においても（全ての人が同じ人間として平等な尊厳を持つている）といった考え方が少なくとも建前としては登場してから今日まで、ほぼ一貫していると言えよう。そしてそれは教育の分野に限られたことではなく、政治、経済、そして文学の分野でも、しばしば目にされる。

文学作品で「白痴者」（知的障害者）は人間か否か」という問いを内包しているもので、戦前に限つて列挙してみると、国木田独步「源叔父」（明治三十年八月）・「春の鳥」（明治三十七年三月）、

泉鏡花「高野聖」（明治三十三年二月）、島崎藤村『家』（明治四十四年十一月）、宮城露香「小説低能児」（大正二年二月）、芥川龍之介「偷盜」（大正六年四月―七月）、鈴木悦「白痴の子」（大正六年六月）、谷崎潤一郎「金と銀」（大正七年七月）、伊藤野枝「白痴の母」（大正七年十月）、有島武郎「星座」（大正十年七月―翌年四月）、鈴木泉三郎「美しき白痴の死」（『鈴木泉三郎戯曲全集』大正十四年五月―プルトン社）収録、小酒井不木「白痴の智慧」（大正十四年十一月―翌年一月）、石井充「白痴」（大正十五年四月）、太宰治「名君」（昭和二年一月）、夢野久作「いなか、の、じけん」（昭和二年七月―昭和五年一月）、松永延造「職工と微笑」（昭和三年）、逸見廣「白痴」（昭和三年）、矢田津世子「反逆」（昭和五年十二月）、岡本かの子「汗」（昭和八年五月）、北条民雄「白痴」（昭和十年四月）、小栗虫太郎「白蟻」（昭和十年五月）、田畑修一郎「南方」（昭和十年六月）、岡本かの子「みちのく」（昭和十二年十月）といったところか。文学において、幾度となく「白痴者」（知的障害者）は人間か否か」という問いが問われてきたことが確認できるのである。近代における（人間とは何か）という問いかけと、「白痴者」の文学的表象の同時発生は偶然ではない。「知的障害者」の表象を問うことは、その時代その時代の「人間」（限定的）を問うことであり、同時に人間（どんな人でも全て人間）の人間を「人間」たらしめる言説や価値観をも問うことである。

筆者は以前、「春の鳥」論（『九大日文』⁰⁴）平成十六年四月）と題した拙文を綴つたことがある。これをそのような関心（観

点から整理すると、次のようになる。

筆者はまず、「春の鳥」の主人公「私」の属性として、〈翻訳者〉（他者の意志や主体性を翻訳する者）の側面と、〈科学者〉（当時の科学言説は「白痴者」には理性や主体性がないとしているが、そのようにまなざす者）の側面を想定した。そしてその上で、主人公「私」は「六歳（白痴）の少年」の意思、主体性を回復できていない（「私」の中での〈翻訳者〉の敗北）と論じた。富国強兵がキーワードである当時の「人間」観については、啓蒙主義的進歩史観が強力に〈教育による理性の進歩、それによる社会の向上〉を謳っている以上、〈教育が一定の効果をもち、それによって知力や主体性が進歩していく者〉が「人間」と見なされたと考えることは妥当と言えよう。「私」の中の〈翻訳者〉が敗北し、「白痴者」には理性が無いとする〈科学者〉が勝利している以上、「六歳」は「人間」にはなり得ず、死なざるを得ない。「六歳」のモデルとなった人物は亡くなっていないにもかかわらず、国木田独歩が「六歳」を死なせざるを得なかったのは、〈「六歳」を人間として描くための戦略として、「人間」(理性ある者)にしようとして失敗したから〉と言えるのではないだろうか。そしてその失敗の結果、〈「白痴者」／「人間」〉という二項対立を強化してしまうことになったとは言えないだろうか。このことは、普通教育の充実により、今まで観念的のみ僅かに問題にされてきた「白痴者」が、現実の問題視され始めた明治二十年代を時代背景としていること等を考え合わせても、強ち穿ち過ぎとは言えないように思われる。

石井充の「白痴」は大正十五年四月発行の『文芸行動 第四号』に掲載された作品だが、大正期の「人間」観も、大枠で言うと「春の鳥」発表当時からさほど変わっていないと言えよう。大正末の「人間」観を考える上でキーとなるのは、デモクラシー運動であろうが、例えばそのイデオロギーとも言える吉野作造の「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』大正五年一月）を見ても、そう言えるように思われる。吉野がこの論文で言わんとすることを要約してみると、日本国民はもはや教育については皆問題は無いのだから、成人全て（ただし「狂者」、「犯罪人」、「貧民救助を受くるもの」、「破産の宣告を受けたるもの」、「浮浪の徒」は省く。「婦人」については保留）に参政権を認めるべきだ」といったところであろう。婦人参政権についても、例えば与謝野晶子「婦人も参政権を要求す」（『婦人公論』大正八年三月）等は、吉野の主張の要約の「婦人」については保留を取り払いさえすれば、後は全く同じと言っても過言ではあるまい。それどころか、その本文中には、

民主主義の家庭は、その家長の専制に依つて家政を決することなく、必ず家庭の協同員たる独立の人格を持つた年頃の家族と共に公平に合議して決せねばならぬ如く、国家的政治もまた国民全体の意志に依つて決することが、合理的な民主主義の政治である限り、或年頃に達して独立の人格を持った国民——例えば満二十五歳以上に達して、白痴でなく、六カ月以上一定の地に住し、現に刑罰に処せられ

ていない者——こういう意味の国民全体が衆議院議員の選挙権と被選挙権を持つて、間接または直接に国家の政治に参与することは、立憲国民に固より備つた正当な権利であるのです。(略)

普通選挙といえは、当然そのうちに男女の参政権が含まれているものと私は考えたいのです。この権利の要求から婦人を除外することは、婦人を非国民扱いにし、低能扱いにするものだと思います。決して徹底した普通選挙とはいわれません。もし男子のみに限られた普通選挙が実施されるとすれば、選挙有権者は——二十五歳以上の男子として——千二百八十三万九千六十二人を数え、現在の有権者数に比べると非常に増加するに違いありませんが、これに二十五歳以上の婦人を加えることが出来たら、男女合せてほぼこれの倍数である式千五百万を計上することになり、我国総人口の約四割、現在有権者数の約十七倍に当ります。そうなつてこそ真実の意味で国民全体の政治ということも出来、私たち自身の政治ということも出来ると思ひます。

といった記述すら見られ、(吉野作造の主張は「白痴者」に就いてはどうか)という問いを発する者(まずいまいと思ふが)への答えの代弁とも言い得るであろう。与謝野晶子の論法は、まず「独立の人格を持」たぬ「白痴者」、「低能」者を他者として困い込み、その共通の他者に対する「私たち自身」とすることで参政権を主張するといったものだが、このような排除が

「白痴者」(知的障害者)は人間か否か)という問いを内包していることは疑い得ない。吉野作造と与謝野晶子、二人の(あるいは他の多くの論者も含めてよいであろうが)主張は、いかにも同じではないが、「白痴者」を「人間」とみない点では、同じ穴の貉であると言えるし、この限りで大正期の「人間」観は「春の鳥」の頃のそれと変わりはない。

本稿の最初に紹介した脇田良吉『異常児教育の実際』には、「異常児はどうして判るでせうか」の「四 余の見方」に次のような一節がある。

十人十色といふが一人は一人色であつて、同様の子供は一人もない筈であるさうすると正常児とは何か、普通児とは何か其標準を定めなくてはならぬ。而して其標準も児童といふ人格者よりも、学校といふ教育機関によつて定めて見たい。これ迄にも時々調べたやうに、国民教育を受けるために、公私の小学校で教育を受ける事の出来る資格のあるもの、之を総称して普通児といひたい、而してもしそれ之れを学術的に定義するならば「心身の發育状態年齢相応にて其時代と境遇に適応し得るものを普通児といふ」斯ういふやうに定義するならば心身の發育状態が年齢とは不似合である、例へば年はまだ十歳内外であるのに、顔容は壮年のやうである、又時代は大正時代に育つてゐるのに、何百年も昔の事をよく知つてゐたり、又は豫言者見たやうな事をいつて見たりして恰も

狂人ではないかと思はれるやうなものは異常児である。

こういった記述は、脇田の他の著作『低能児教育の実際的研究』(大正元年十月 巖松堂書籍)や『異常児教育三十年』(昭和七年十一月)等)や、他にも例えば三宅鉦一『白痴及低能児』(大正三年二月 吐鳳堂書店)や藤岡眞一郎『促進学級の実際的研究』(第五版 大正十二年三月 東京啓発會編輯局)にも見られる。普通教育と政治が手に手を取り、(教育の場)では、教育できぬ者は「異常」であり「人間」ではないだろうとし、(政治の場)では、教育できぬ者は「非国民」(与謝野)であるとする。労働者や婦人達被支配者(の代表を名乗る知識人達)が、「人間」にならう(しよう)と戦っている傍らで、「白痴者」がどう利用され、まなざされていたか。繰り返しになるが、このように「知的障害者」を中心に明治末から大正末年を眺める時、大枠としての「人間」観はほとんど変わっていないと言わざるを得ない。

とはいえ、それを保障する(教育)言説については、大正期に一つの亀裂が走ったという事は視野に入れておいた方がいいだろう。すなわち、このような(教育)言説に対して農本主義言説が異論を唱えた。普通教育など不必要、たという考えが農本主義において積極的に述べられたのだ。日本の帝国主義的な膨張を農本思想がいかに支えてきたか、農本思想の内実と権力の問題に注目し考察している綱澤満昭『近代日本の土着思想―農本主義研究』(第三版 昭和五十年一月 風媒社)・『農本主義と天皇

制』(昭和四十九年十月 イザラ書房)でなされている当時の農本主義の代表的な論者の紹介を、いくつか引用しよう。

横井(筆者注―横井時敏(一八六〇―一九二七)のこと)にとっては「普通教育」は敵であった。横井がここでいう「普通教育」とはいうまでもなく明治国家が近代化を遂行するために採用した「学校教育」のことで、「組」「塾」「藩校」の教育を除いたものである。この「普通教育」はややもすると旧来の秩序意識を破壊する契機をはらんでおり、その根源は知育偏重の教育にあるとみる。この都会中心、画一的な知育的教育によってゆがめられた人間を横井はふたたび伝統的秩序へと再教育しようと試みた。それが「営利」「出世」を無視し、武士道精神を注入した「実用的教育」となつてあらわれるのである。

(『近代日本の土着思想―農本主義研究』より)

この「農民道」(武士道)の鍛練の「場」として山崎(筆者注―山崎延吉(一八七三―一九五四)のこと)は昭和四年に「神風義塾」を開設した。このころ、即ち、大正末期から昭和の初めにかけては形式的、機械的、西欧的、都市文明中心的な学校教育にあきたらないという理由で、日本精神鍛練を目標としたいわゆる「道場」「塾」が流行していた時期であった。(略)

山崎はこの「神風義塾」の目的を日本民族の本性に基

づいた皇国および農民の「道義」を養い、愛国的農民を育成する点において。教育方針としては決して官公立のごとく学理におぼれることなく、「技術ト数字ヲ超越シテ働ク一種靈妙ナルカニシテ、實際経営ノ努力奮闘ニ依ツテノミ体得セラルルモノナリ、決シテ学校ニ於ケル、没的生活、或ハ理論的推究ニヨツテ其機微ヲ窺ヒ得ルモノニアラズ。：(略)：生徒教養ノ主眼ハ健國ノ精神ニヨル祖神ノ礼拝ト、農場ニ於ケル職員生徒ノ協力ニヨル真剣ナル労働生活ニアリテ高遠ナル学理ノ解説ニアラザルナリ」という。

(『近代日本の土着思想—農本主義研究』より)

加藤(筆者注—加藤完治(二八八四—一九六五)のこと)は、農業の真義は大学や書物によつてわかるものではなく、「生の体験」を通して、生を徹底させることによつて、はじめてわかるという。(略)

このような時代的背景のもとで、加藤は一切の虚無的、厭世的、逃避的思想を否定し、堂々と勇敢に真正面から人生を肯定していく積極的姿勢を示し、農民教育の一般教育への普遍化をねらった。それがたまたま大正期に展開した新教育運動と奇妙なかたちで結びつくことになったのである。学校教育のもつ知育偏重、つめこみ主義、受動的学習に対し、強い反発を示しながら、カリキュラム無視、自然のなかにおける自動教育、労働重視の教育をかかげながら、玉川学園や自由学園が誕生したのはこの時期である。

(『農本主義と天皇制』より)

いずれも普通教育に対し異を唱え、実際の農業体験を重視していた点では共通している。もちろん、異を唱えていたのは何もこの論者達だけに限ったことではなく、他にも例えば権藤成卿(一八六八—一九三七)や橘孝三郎(二八九三—一九七四)等も加えてよいであろう。このことから農業は普通教育の場から追い遣られた「白痴者」の就き得る職業の一つと言つてよからう。それは、

教育ノ目的ニ真正ノ低能児ハ、如何ニ教育スルモ、コレヲシテ、普通児ト同等ノ成績ヲ挙ゲシムルコト能ハザルハ、
欧米ニ於ケル、永キ経験ノ証明スル所ナリ。サレバ、補助
学校ノ教育ニ於テハ、徒ラニ、難キヲ兒童ニ求ムルコトナ
ク最初ヨリ、目的ヲ卑近ニ取り、先ヅ、兒童ノ常識並ニ徳
性ヲ涵養シ、早ク職業上ノ智識技能ヲ授ケテ、自活ノ道ニ
就カシムルヲ得策トス。 (『白痴及低能児』より)

といった主張(『促進学級の実験的研究』等にも同様の記述は見られる)や、原澄次『日本農業改造論』(大正十五年七月 明文堂)「一二文明国の農業」の、

一般に此の子供は馬鹿だから百姓をさせるといふ様だが、
之れが農業の進歩が後れる一つの原因にもなつて居るので

はあるけれども、我国従来の農業ならば幾分の低脳者でも全く出来ぬことでは無いのであつて、農業上の作業が複雑であつて熟練を要するといふことは、農業の進歩の困難である強い理由とはなり難いのである。

といった記述、あるいは宮城露香の小説「小説低能児」²を見てもそのように言えるであろう。そして、普通教育の施しようのない「白痴者」と、普通教育など与えない方がいいとする農本主義言説に一致が見られること、もつと言えば「白痴」は農本主義が示す理想的な農民（人間）像の極端なるものであることは疑い得ない。

政治や教育言説に見られる「人間」観及び「白痴」観と農本主義言説のそれとの間には以上のような違いがあると、ひとまず結論付けられよう。

三 農本主義言説と「白痴」という装置

石井充自身農民で、他の三作品（小説「子を失ふ百姓」〔『文芸行動 第一号』 大正十五年一月〕³、随筆「土臭者の言葉」〔『文芸行動 第六号』 大正十五年六月〕⁴、小説「春」〔『農民 第二巻第五号』 昭和三年五月〕の三作品）も、いずれも農民を描いているが、小説「白痴」では農本主義的農民像を極端にしたものとして「白痴」を用いていると考えられる。そこで、次にこの作品における農民像について考察することにしよう。

謙介が実際に農作業をしている場面は、第一章の最初、第二章の最初の鶏の世話の場面、そして同じく第二章後半の「胡瓜にポルドー液を灌ぐ」場面の三つ。謙介の農業についての考えは、第二章の五助の台詞の後に述べられている。その謙介の考えの中には、「だが五助が呉れようとする大きい胡桃からは、既に柔かい実が剥抜かれて終つて居るやうに思はれてならなかつた。」といった一文があり、この「柔かい実」はその直前の「彼は土地からは生命の出で来るのを喜んで居た。土を打つ、大地のほひが立つ、種を下す、芽を出す、伸びて行く、花を開く、実を結ぶ、そして収穫！その時々喜びが、謙介の喜びであつた。」から、農作業によつて得られる喜びをさしていると言える。第二章の「謙介は「本気に、土の中にある不思議な力のことばかり考へて居た。」の「一本気」さ（一途に信すること）、第一章冒頭の「余念なく茄子に肥料をかけて居た。」の「余念」のなさ、第二章後半の「夢中になつて胡瓜にポルドー液を灌ぎ出した。」の「夢中」さは、この「柔かい実」の実感に基づいていると考えてよいだろう。そうだとすれば、「農民」について考察する上では、実際に農作業をしている三つの場面よりは、謙介の農業についての考え、観念を考察する方がよいと言えよう。「柔かい実」に対立するのは五助の言に読み取れる（金儲けのための農業）である。このような二項対立において（農業の喜び）を選択するということ、加えて、「都会」の、「医科大学」から「運命的な、重い脳病」になつて「田舎」に帰つてくるといった、作品世界における「都会」／「田舎」という二

項対立がその背景にあることから、「田舎」で農作業を楽しむ謙介の考え方（あり方）は、横井時敬や山崎延吉等の主張するところの農本主義的（後に紹介する）であると考えられる。

当時の農本主義言説がどのようなものであったかを紹介する前に、農本主義が出てくる背景（歴史）を少し確認してみよう。

農村はすでに動き出していた。大戦景気による米の値上りで、地主たちが巨大な利益をおさめると、貧富の差はだれの目にも明らかかなように大きく開いていったし、工業生産の拡大にもなつて農村から賃労働者が吸いあげられると、小作人たちは、賃労働とくらべて小作労働がいかに報酬が少ないかを知ることになった。小作制度の不合理が実感としてつかまれたのである。

（今井清一『日本の歴史23』昭和四十一年十二月 中央公論社）

この時期に（筆者注―大正末から昭和の初め）、このように労働運動や農民運動が急激な展開をとげたのには、むしろそれだけの背景があつた。これを社会的な背景の面からいえば、第一次大戦後の世界的なデモクラシー勃興の波が日本にもおよび、そのなかで国民の政治意識がいちだんと高められたことや、外ではロシア革命の成功が、また内では米騒動以来の大衆運動の発展が、労働大衆を勇気づけたことがまずあげられるべきであろう。（略）

農民についていえば、やはり第一次大戦を通じて商品経

済の農村への浸透が決定的なものとなつてきた点が重要だ。そのなかで農村の古い共同体的な社会体制はしだいにくずれていき、また地主はしだいに農業経営や村の世話をするところから離れて、いわゆる寄生的な性格を強めていった。それにかわつて一部の中農たちは、小生産者としての上昇・成長に強い意欲をもちはじめようになつたし、他方、小作貧農たちは、外部の社会に接触する機会がふえるにつれて、自分たちの生活のみじめさをはつきりと自覚するようになった。こうしたことはすべて、資本主義の発達のおかげで、農民の生産物の商品化と下層農家の労働力の外部への販売が急速にすすんだことの結果であるが、そこから重い小作料の負担をはねのけて、みずからの小生産者としての発展なり、みじめな生活の改善なりをかちとろうとする農民の運動が生じてきたのであつた。

（大内力『日本の歴史24』昭和四十二年一月 中央公論社）

補足しておく、地主が「寄生的な性格を強めていった」のは、地主が都市で銀行投資等に手を出し始めたことや、米価の下落等で農業に魅力を感じなくなったこと等が理由として考えられる。同時に小作争議も年々増え、石井充「白痴」発表当時はほぼピークだったと考えられる。謙介の家は相当に豊かな地主レベルだと考えられるが、それは、一つには「抜け目のない」百姓の五助の「兄さん、前の畑は貸したがいゝね。さうだつべ。おめえよく考へて見るがいゝ。おめえがあん畑に火箸棒見てえ

な葱や猫の金玉くれえな茄子を作つたつて、一年いくらのもんがあると思ふかね。あれを坪七錢で貸して見るがいゝ。葉をして居て、好きがゝりなセン菜工が買へて、余つてけえるぢやねえか。坪七百つて、お前、月たよ。」という台詞とその後の「彼には五助の云ふ計算のことは解つて居た。」という語り(つまり、地主化すれば儲けがあるということ)、二つには綱澤滿昭『近代日本の土着思想』「Ⅱ 昭和恐慌下における「経済更生計画」と農本主義」の「この表に示されている農家は、一町五反より三町の耕作面積をもつ相當に豊かな農家であるが、しかし、調査の結果は農家の平均総収入から平均総支出を控除した平均余剰額が大正十四年には三〇八円、余剰のあつた農家は全体の八一%であつたものが、昭和五年には平均不足額七七円、余剰のある農家は全体の三五%にすぎず、不足農家が六五%をしめた。この程度の農家にしてこのような状態であるから、それ以下の農家が生死の間をさまようのは当然のことであつたろう。」といった記述(ちなみに、大正十五年には平均余剰額は百八十九円、余剰のある農家は全体の六十パーセントにまで落ちてゐる)から、そのように判断した。しかし、謙介が地主にならうとしない以上、「一年いくらのもんがあると思ふかね。」と言われるような、(採算の取れない農作業)であることも視野に入れておく必要がある(この作品は謙介の家の持つ土地の規模や小作人の有無がぼけてゐるが、以上のような把握は可能であろう)。農本主義の出でくる背景に戻るが、これらの引用からも、都会と農村の金銭的な関係、地主の寄生的性格の強化や小作人の反発といつた(地主や小作人が農業に

魅力を感じなくなつたが故の農業離れ)を、当時の背景として考えてよいのではないだろうか。

当時の農本主義言説については、以下の記述を引用しておく。まずは横井時敬から。

横井は農業技術者としての座をしりぞぎ、もつぱら農業、農民教育に終始することにより、地主的農本主義者としての確固たる地位を獲得するにいたる。彼は地主(耕作地主)が「都会熱」によつて「自殺」しつつある現状を憂慮し、あらたな覚悟と任務の前に立たされたのである。(略)

銀行の頭取になりたい、支配人になりたい、また政治家に、あるいは役人になりたい、これらすべて「都会熱」に毒されている見本だという。恐るべきはこの「都会熱」をもたらす「資本主義化」であり、「金銭時代」である。横井は「今日農業界衰退の大原因は何処にあるか、経済の不安定、経済上の困憊ということもその一大原因に相違ないが、之よりもっとく根本的な大原因がある。農業に満足せずむしろ之を厭ふ傾向は、其原因を経済上へのみ求むることは出来ない。我國民全体の大欠陥は金銭に憧れる事である」(現代の大欠陥と教育の本義)「横井博士全集第九卷」と断言し、この風潮をくいとめるために「武士道精神の復興」を「地主層」に期待する。(略)

ドイツには昔の武士がなお百姓として残存していて、しかも日本と異なり、地主はすべてみずから耕作してゐるし、

他に土地を貸しているものは少ない。日本はこれを見習うべきだという。(略)

都会中心、知育偏重の教育によってゆがめられた人間を横井は再度伝統的秩序へくみいれるべく再教育しようとした。農業の神聖さが強調され、土地への定着をおしはかり、都市、商工業の農村、農業に対する優越性は事実として認めざるをえない立場におこまれていたにもかかわらず、それを常に論理的には批判、攻撃し、農村、農業の「健康」で自然にいだかれた田園を賛美する。(略)

農業は金に憧れることなく、土と親しみ、大自然を友とし、無欲にして、汚き人を相手にせず、業それ自体に樂があり、慰安がある。それに較べ、商工業は金銭以外には何物もない、都会のみ発達すれば、その国家は極めて危機といわねばならない。都会の欠陥を補い、国家を安泰ならしめるものは、農業を除いてほかにない。

(網澤満昭『日本の農本主義』昭和四十六年二月 紀伊国屋書店)

横井の言う農本主義の主張を要約すると、(知育偏重の教育に毒されて都会を羨むことなく、金に執着することなく、地主も小作人もひたすら農作業に幸せを感じよ)といったところで、齋藤之男『日本農本主義研究』(昭和五十一年十二月 農山漁村文化協会)に、

橘が理想部落の興亡はひとえに教育にかかるとして、教育を最重要視していることは既にみた。彼の見る教育の現況は、大都市中心主義的・主知主義的職業教育・理智偏重・科学万能主義・大学の技術員養成所兼職業紹介所化であり、農村を注視すれば、そこでの教育は都会思想によって動かされ、農民は自己の本質を全く忘れていた。

ではいかにすべきか。現代教育を「根本より改廃」して、人格教育を推し進めることである。「一般的の爲めに提唱されねばならん我々の教育とは、人格的勤労主義の精神に基く、自営的勤労学校組織の教育であらねばならん」。(略)

「勤労と言ふ言葉は甚だ誤解され易い言葉である。一般的に勤労と言へば、朝から晩まで牛馬の如くに労作するを以て勤労と称するかのやうに用ひられておる。此処で勤労といふ言葉の有する意義と内容は、さやうな牛馬主義的労作を指して言ふのでは少しも是有り得ない。一言にして尽すわけにはまゐらんであらうが、要は、人間性の本然のある所に従つて、その本性を尽し、その天職の存する所を完うし、使命を果すを以て勤労の本義とせねばならない。：

：人は勤労せずして生存する能はざると同時に、勤労精神を離れて存在し得るものではなかつたのである。此処にまた人間の本性性の一端が示されておる。靈性の一端が示されておる。そして、これあればこそ人間への本然性的、靈性的真価が生み出されて来るものに外ならない。同時に人間は其処に於て始めて、自主的人格者としての存在を発見

し得、併せて最高の満足と悦楽とをくみ得る事が許さるるものと申さねばならない」(『建国』。(略))

熟練労働は習熟によつて獲得されるが、習熟には労働対象の分析的な知識の教習を特に要件としない。けだし対象は無機的なものではなく、有機的な「橘の用語では」生命ある「一」ものである。習熟とはこの対象の性質を労働(働)き()のうちに体得することであり、そのためには対象に対する愛護の精神が必要となる。この精神の働きを持つ労働が、すなわち橘のいう勤勞であつて、それは一般化・普遍化できない価値を持つ。

とある。(「農村を本とした都会と農村の相互発展、農村における(都会中心・理智偏重ではない)「勤勞」教育。「勤勞」とは農民としての使命をはたすことであり、「勤勞」あるが故に真の人間であり、最高の幸せが得られる。その教育は知識の教習ではなく、実際の労働のうちに体得するものである)。橘の主張を要約すると、このようになると思われる。権藤や橘の農本主義は、それが唱えられた時期という意味では石井充「白痴」より少し後かもしれないが、昭和恐慌以降の農村の窮乏は大正末にも潜在的にはあつたと考えれば、視野に入れておいてよいであらう。

次に、山崎延吉の農本主義言説を見てみよう(いずれも『山崎延吉全集第五卷』(昭和十年四月 山崎延吉全集刊行会)より)。

英国流の政治家が当路に在つた事は事実であるが故に、英国の政治に則つて商工立国の政策を是なりとし、都市偏重に陥つた事は何人も否定する事の出来ぬ事実である。

(略) 成名を希ふ者、成功を欲する者は、男女を論せず勇躍して農村を去るは無理もない事である。如斯して今日の農村に人物を欠き、資本を欠き、労力を欠き、青春の氣をも欠き、寂寞の感に堪へずなり、果ては自己を呪ふ様になるは、今日の農村の情景である。手に鋏を握り、鎌を振ふる人も、心には迷ひつゝあるが故に、なす事する事に力が入らず、魂がこもらぬ結果、出来る事でも出来なくなり、やれる事もやれぬ様になり、奈落の淵に陥るばかりでは疲弊が甚だしい道理である。(略)

政治も多数本位であり、政策も多数本位の今日、教育に於ては不変二三の秀才を自当に力を入れるがあり、月給取養成に努力するがあり、都市を目的とするものもあるは、教育の時代錯誤であり、それが農村に及ぼす悪影響は枚挙に暇なしである。教育をすればする程、農業がいやになり、農村に腰が落つかずなり、左視右往の徒が殖へるばかりである事は全国的であるのである。(「農民道の闡明」)

今の世はともすれば農耕の道を疎んじ、田舎住を避け、田園の人として汗脂を流すことをいやがる風がある。此の時にあたりわれ等は、われ等の仕事の貴い事を悟り、われ等の家業の大切なことを知り、われ等の住む田舎こそ我国

家の土台であると云ふことを弁へて、飽くことなく倦むことなく、怠たることなく、惰けることなく、いつも心持よく、深く働くことが出来れば、それこそ真に人に生れた甲斐があると思ひます。
(「農家少年訓」)

神聖なる労働は無意識でやるべきでなく、同時に命令や欲のために汚がされるべきではない。生命の生産にいそしんで、宇宙の大生命の彌榮に貢献するてふ自覚の下に、血の出るまで働くべきである。故に一時間でも余計に働く事が出来れば、其処に喜びを感じ一人倍の働きが出来れば、其処に歓喜することが出来ねばならぬとする。(「農民道」)

これまた要約すると、(教育に毒されて都市を目的とすることなく、生命を生産する尊い農作業に楽しみを感じてこそ真の人間だ)となるかと思われる。

最後に、「時の支配者」(＝国家)の望む農民像についての綱澤のまとめを見ておこう。

明治から昭和にわたる農本主義者の一貫して説く理想的人間像は、労働の乱費を惜しまず、低生活水準に甘んじ、勤儉力行、国のために下積の犠牲をはらうことをもって「光榮」とするといった精神構造の持主であつた。(略)

いうまでもなく、生産様式にとつて決定的なものは、労働手段である。労働手段の変革こそ、労働生産性を高め、

生産様式を変革するものである。しかしここにみられるものは、人間の労働の無制限的乱費のみである。そしてこの労働の「苦しみ」に対しての慰めは、「農業は、最も尊貴にして且つ最も有益であり、健康なるものである。金に憧れず土と親しみ大自然を友とし、無欲にして汚き人を相手とせず」(略)：業それ自身に楽しみがあり、慰安がある。」という言にみいだされる。農本主義思想の敵はいうまでもなく、「商工業」、「都会」である。農業は、「実に国家社会の根幹である。商工業は金銭以外の何者でもない。都会のみ発達せんか、その国家社会は甚だ危険といわねばならぬ。都会の欠陥を補ひ以て国家を安泰ならしむるのは農である」。

このような精神的慰めを唯一の支えとして日夜宮々と鏝をうちこむ農民の姿、それこそ時の支配者にとつて、実に望むべき人間像であつたのだ。

(「近代日本の土着思想」「農本主義的「禁欲」と「職業観」)
「農本主義思想の敵はいうまでもなく、「商工業」、「都会」である」とあるが、「時の支配者」が都会を文字通り敵視するとは考えにくい。都会に対しては対立するポーズのみで、百姓にはひたすら農作業のみ求める(故に都会中心を強化する)農本主義言説は、「国」という「時の支配者」にとつてありがたいものであつたに違いない。国にとつてありがたい農本主義言説という意味では、他にも(有事の際、質の良い兵士を大量に生産・

供給するために、農村は今のままであらしむるべきだ」といったことや、〈農村を社会主義運動への防波堤（自作農奨励という私有財産の肯定）。農民運動や農民組合は大正末頃から次第に右傾化していく〉として利用）するといったことも考慮できる。

当時の都会と田舎の金銭的な関係、地主・小作人の農業離れ。こういったことを背景にして出てきた、都会（中心主義）に對立的ポーズをとり、それにおおりをうけての教育も名譽も金欲もかなぐり捨て、ひたすら尊ぶべき農業に幸せを求めよと主張する農本主義言説。「重い脳病」にかかり、エリート街道（教育）をドロップ・アウトして田舎に連れ戻され、金銭に執着することなくひたすら農作業に「歎び」を感じる謙介のあり方、考え方は、当時の農本主義言説の求める眞の農民（眞の人間）像に極めて近いと言えよう。

然し、当時、現実問題として、農業自体は食べていく（生きていく）には無力であったことも確かであろう。口減らしをかねた都会への出稼ぎ、娘の身売り、あいつぐ小作争議と小作側の敗北。地主階級とても安泰ではあるまい。しかし、地主化して、小作人を生かさず殺さず「抜け目」なくやっていけば、食べていける収入を得られることを「解つて居る」謙介は、採算の取れないことを知りつつ、〈農業の「歎び」〉（＝農本主義的農民像）を選ぶ。謙介の家は相当裕福であろうから、直ぐにどつこういうこともないであろうが、やがて立ち行かなくなるこの分かり切った選択肢を謙介はあえて選ぶのだ。

その自滅的な農本主義的農民像、その選択は、いかにも「白

痴」的で、他人に理解されるようなものではないであろう。つまり、謙介は、「知的障害者」としての「白痴性」を併せ持つ文学的言説としての「白痴」として描かれているのである。文学的「白痴」とは、この場合、ドストエフスキー『白痴』に見られるような、無欲で飾ることをしない、常識のない、眞の幸せをしる純なる者のことである。「併せ持つ」と先ほど書いたのは、『白痴』でも主人公ムイシキン公爵には「知的障害者」としての側面が描かれているし、そもそも「白痴」という語は「知的障害者」を指す語なので、そのような要素を孕むからである。

「白痴」の装置性は、

①実際に後天的に「白痴者」である（重い脳病）や「不気味さ」等）が故に、〈馬鹿〉や〈愚直〉、〈デクノボー〉と違つて「田舎」に生まれ「田舎」に終わることなく、「都会」から「田舎」へというベクトル（「都会」に縁付いて「田舎」から出て行く貞子とは逆）が作品世界に作られ、「都会」と「田舎」という二項対立が持ち込まれる。

②前章でも述べた、農本主義の主張する（農業における教育の必要性）（学問を絶つことは、人間の生活を無くすことのやうに騒いだ。」（第一章）等）の極端なる場合であることを含め、〈無欲で純粋で、眞に幸せを感じる者〉を描いたドストエフスキー『白痴』の邦訳が大正九年には出ている事から、自滅的な農本主義的農民像をあえて引き受ける上で適當であるということ。

と、まとめられるであろう。本文中には「白痴」という語は用

いずにタイトルに用いたことも、「土臭者の言葉」（大正十五年六月）で農本主義者を指していると思われる「農村振興に就いて、いろいろ」と説をなして呉れる。「識者達」の「いろいろ」の説

を、「都会の空中にでも舞踏している」「名論卓説」とアイロニカルなまなざしで見ていることも、その理由はこの「白痴」の装置性、都会中心主義の強化につながる（その意味で農民にとってハマイナスに思われる）農本主義言説を「白痴」としてあえて引き受けていくということにあるのであろう。プロレタリア文学等によく見られるような、惨状をセンセーショナルに書く小説よりも、その決意たるやよほど悲痛ではなからうか。

しかし、いかにも悲痛ではあろうが、その家族や関係者にしてみれば、たまったものではないであろう。そもそもこの作品では、「家」と謙介が耕している「畑」が「道」によって「隔て」られているというように、冒頭から対立が暗示されており、随所に対立が織り込まれている。謙介の母が「（これが一人前であつて呉れたら！）」と謙介のことを貞子に眼で語る¹⁰のは、なにもエリートになり損ねた（もはやなり得ぬ）「白痴者」だからという理由だけではあるまい。採算のとれない農業に現をぬかす農本主義的農民である謙介への無言の非難も多分に含まれているであろう。本文中には「白痴」という語を出さず、タイトルに「白痴」としている以上、本文すべてに「白痴」という装置はかかっている。つまり、農本主義的農民像だけでなく、そのようなあり方に対し家族が感じる迷惑に無頓着であることにもタイトルの「白痴」はかかっているのではなからうか。

四 人間として描く戦略性

最後に、石井充「白痴」における、「白痴者」を人間として描く戦略性について、これまで考察したことを踏まえつつ評価したい。

農作業をする上で「白痴」であるかどうかはいかにも関係ない。そのことは「脳病」とされている謙介とて例外ではない。その単語が専ら使われている言説内（その語をよく見かける言説・文脈内）からその語を取り出し、他の言説・文脈内で用いる——「白痴」という語は教育制度の中で実定性を与えられ、政治等とリンクしていったが、それを農業という他の言説・文脈内で用いる——ことで、安定していたその記号のシニフィエ（概念等）を不安定にし、豊かに、流動的にしていく。語の適応箇所を増やしていく石井のこのような作品が、後の、例えば小林完吾『愛、見つけた』（昭和五十八年十一月 二見書房）に見られる「みのり村コロニー」の大木園長の「収容するのではない、なにかもつとよい手だてではないものかと、あれこれ話をきいたり本を読んだりしていたとき、精神薄弱者に懸命にかかわっている先輩からこういわれたのです。『精神薄弱者にとって、いちばんなじみやすいのは土だ』ほかのことにはなかなかなじめなくとも、土ならなんとかなる。そこで、土を利用してなにかできることはないかと考えまして、それには農園経営が最適だということ結論を得たわけです。」といった発言、近藤原理・清水寛編『こ

の子らと生きて』(昭和六十一年七月 大月書店)や、文学作品ではないが石田周一『耕して育つ』(平成十七年五月 コモンズ)といった本がうまれる土壌にもなっている。しかし、農作業等の仕事が出来、マイナーな言説の上で立派な人間だと保障してもらっても、それが即家族から、あるいは社会で一人前扱いをされるということにはならない。その言説を受け入れようとはしない多くの者達にとっては、所詮は厄介者ではないことは明らかであろう。安易に都合のよい言説(今日だと芸術等か)内に逃げ込み、かくまってもらっても、そこでのみ人は生活していくことなど叶わぬ以上、この限りにおいて得策とは言えない。

しかし、たとえマイノリティーであっても、その言説とつながることで、多少の自由や選択肢が得られることも確かであろう(農業の領域における農本主義というマイノリティー!)。「知的障害者」というレッテル自体が差別だという主張等も、時折耳にするが、分節化それ自体はそのように切り取ることが便利であったり有意義であると思われるからなされるに過ぎない。人間を「高校生」や「医者」といったように分節化すること自体は差別ではない。問題なのは語のもつシニファイエだ。この石井充「白痴」の場合、そもそも謙介を一人前に農作業(仕事)のできる者として描いており、それはそれで実定性(本当らしさ)をもつならば、「知的障害者」の就職等に関して有意義があると言えるのではないか。

最後に、本稿で考察した文学的「白痴」言説のゆくえについて展望を述べておく。ドストエフスキーの段階では、あまりの

純粹さや誠実さ、無欲さや朴訥さ故に、(他者によって)「白痴」と呼ばれていただけであった。これに対して石井充「白痴」では、(無欲で純粹で真の幸せを知る社会的(言説的)周辺)を引き受ける時に(自ら)「白痴」をもって任じている。このことは、この後直ぐに出る雑誌「白痴群」がその流れをつくつていくが、石井充「白痴」はその先駆的作品と位置付けられよう。

いずれにせよ、明治期の「白痴」表象(春の鳥)では「白痴」でも「少年」であれば「天使」(純なる者)ではあるが、「白痴」そのものは異物以外の何物でもない)と違い、自ら任じようと思う作家が現われる(「白痴者」とそうでない者との間に通路ができる)くらいには「白痴」という語のニュアンスは(依然として社会の異物といったニュアンスは根強くあるも)豊かになってきており、少なくとも文学の世界ではそのようなニュアンスが実定性を獲得していることは疑い得ないのではないか。しかし、本稿第一章では「知的障害者」としての「白痴」の考察をメインにしつつも、第三章の作品の考察ではその構成から文学的「白痴」言説色が濃くなり、それと交じり合っている「知的障害者」としての「白痴者」表現の現実性を必ずしも作品が十分に表し得ていないことも一方で否定できない。この(もともと純なる者)としての「知的障害者」表象を、おとぎ話の妖精のような本の中のみ存在する者ではなく、現代においてもっとも現実味ある形でなさんとしている作家は大江健三郎ではないだろうか。そこには一体、どのような戦略性が見出し得るのであろうか。それは別稿に譲るとして、おそらくは無欲にして非常識的、真に幸せを知る真の

人間としての「白痴」をはじめて名乗り、他者に理解され難いそのニュアンスを自ら引き受けていく（主体性として獲得する）という石井充の捨て身の試み（戦略）を、大いに評価したい。

【注記】

1 江戸時代でも明治になっても、あるいは大正にあっても、いわゆる「白痴者」に分類されるような人も、多少時間はかかるかもしれないが、ちゃんと農業の仕事はできていた。それが、教育の分野で（明治二十年代頃から）「白痴」というレッテルが（社会の異物）といったニュアンスでもって実定性（本当らしさ）を得てからは、仕事もできる、問題にならなかつた人達を問題視するようになっただけという意味では、いかにもその通りであろう。

2 「低能児」の子「宗松」に、学問よりも早く百姓仕事を教えようとする父と、宗松がいつの日か勉強ができるようになることを信じている母を描いた小説。

3 この作品は「白痴」と同じ位の分量の作品で、「白痴」に見られる語の多くが散見される（学問、「病院」、「都会」、「片輪」、「無智」、「子供」、「呑気」等）。「白痴」発表の一月前の発表ということからも、（登場人物は違うが）「白痴」を「子を失ふ百姓」の続編として位置付けて読むことも可能と思われる。内容を要約しておく、貧しく、「馬鹿」で、「単純」な百姓の彌平は、「学問」の「ずば抜けて」できる息子の博（十三歳）が我慢でならず、博の未来に「過度に労働しないで身綺麗に出来、それで生活に余裕の見える世界」（都会、での生活）を夢み、「百姓は彼一代だけで沢山だと思つて居」る。ある日、博が怪我をして、傷は三日で癒えたと

もかわらず「一層烈しい痛みを訴へ出した」ので、街の病院へ連れて行くと、博は入院することになり、翌日には手術が行なわれる。彌平は博が「片輪」になりはしないか、医員に尋ねるが、医員に「あの患者は、片輪になるとかならないとか、そんな問題じゃあないんですよ、今は死ぬか生きるかと云ふ、命の問題なんですよ！」と言われ、「狼狽へ切つて」しまい、医員を「人の命をどうにでもすることの出来る、神」のように思う。彌平は妻や進（博の弟、身内の者や隣家の爺を病院に呼び、病室で爺を相手に酒を飲み、看護婦や医員に悪態をつく。もつれた舌で進に「あ、進、てめえ兄さんの代に死ぬ気はねえかよ。お父つあんはな、お母あだつて死んでいゝ、よね公だつて死んだつていゝ、……だがあいつばつかりはどうしたつて欲しいや！」等と言ひ、博の頭を抱えて「俺りや、俺りやあ、どうしたつて惜しいや！」と叫び、とうとう親戚の一人に病室から連れ出される。彌平は裸足で病院の外に出ると、初秋の午後「美しく晴れた日」の「光の中」、一瞬、「自分等の鎌を待つて居る」、「もう実つて居る稲の穂波を見た」が、その（百姓の真の幸せ）、「その幻覚もすぐに消えて」しまう。彌平は「自分でも何処へ急いで居るのか全く解らな」いまま、「やゝともすれば突き当りさうにしながら、無我夢中に」「人波に逆つて歩」いていく。

4 短いので、全文を引用しておく。

近頃、百姓のことが、いろいろの人から云はれるやうになつた。それは自分等のやうに長い間農村に住み、また、自身農民でもあるものに取つては、非常に嬉しくもまた力強く思はれる。

所謂識者達は、農村振興に就いて、いろいろと説をなして呉れる。

だが自分はその人達に問ひたくなる、「あなた方はほんとうに農村が振興するものとお考へになりますか？」と。自分は正義のこの世に存在することを疑はない。だが、果してそれは、現今この地上に存在して居るでせうか？農村を振興させる名論早説は多々あるでせう。自分はゆめそれを疑ひません。だがそれは恐らく田舎の田や畑の上には降りて来ないでせう。多分、都会の空中にでも舞踏して居るのではないでせうか。農村の小学校の教師自身すらが優秀の児童の農業教育を受けることを好まない。彼自身の名譽の爲めに、一人でも多く中学校に入れようとして居る。そして農学校の教師、農会なるもの、技手技師は、彼等の俸給の方が農業よりもより多い利益のあることを胸の中で計算しつゝ、農業を教へ、勧めて居る。自分は或る地主の会合の席上で、一人の若い地主の「云つた言葉を忘れることが出来ない。彼は、一老地主の、『百姓も悪くはないさ』と云ふ言葉に対して云つた。

「俺は誰が何と云つたつて、百姓くれえ、割の悪い商売はないと思ふね。見るがいゝ、村の地主で、一人だつて、自分の俸をほんとうの百姓にして居るものがあるかね。俺だつて、自分の子供を百姓になぞしようとは思つて居ないよ！」實際、村の地主の子供で純粹の百姓になつたり、ならうとして居るものは一人としてなかつた。老地主は子供を小学校教員にして居た。

村にも、ところ／＼にアンテナが聳えて来た。然しその聴取者は大地主か医者か、せんべい屋か、豆腐屋か、さもなければ教師である。実際に鉤を握つて居るものゝ家にはアンテナの立てられるのを見ない。かうした事実は何を語つて居るのであらう。農民は吝嗇なのだらうか、それとも生活の上に余裕を持たないのであらうか。

兎に角今日の農民は、大地主を除いて余りに恵まれない生活をして居る。あの大震災直後に東京の人々のした生活を、常態としてして居ると云つても恐らく過言ではあるまい。彼等は実に陰気だ。だが同時に極めて呑気な一面を持つて居る。それは一種、絶望から来たものではないかと考へられる。彼等は「畜生！百姓！」かう韻をふんで、自分等のみじめな生活を誅らめて居る。

5 「都会の」、と書かれてはいないが、「田舎に歸つて来た」と直後にあるので、そう解釈してよいであらう。

6 『日本の歴史23』には、

大正十一年に激増した小作争議はさまざまな困難にぶつかりながらも、大正末年まで増加の傾向をつづけた。大正十五年の小作争議は二七五一件、参加人員一〇六一人で、参加人数は労働争議のほぼ五倍に達している。小作人組合は、翌昭和二年に組合数四五八二、組合員三六万五三三二人で、当時の総農家五三〇万戸の七パーセント、小作・自作農家の一〇パーセントに達したが、これが戦前のピークであった。そのうち日農の組合員数は七万前後であった。争議によつて農民の要求がそのまま実現することは稀であつたが、争議の激発によつて地主の小作料収入はしだいに低められていった。だが農民運動は、自作農をもまきこんで農村の秩序を改革する力にまで成長することはできなかった。

とある。

7 網澤満昭『近代日本の土着思想』で網澤氏が要約している（奥谷松治による時代区分）には、

「第一次大戦後の農村問題」の個所では、夏目漱石、宮本百合子、有島武郎の三大文学者の描いた、崩れゆく農村の姿と、大正六年を基点とする小作争議の激化と大正九年戦後恐慌による米価の暴落による農村問題の重大化に対応して、小作制度改革の準備がなされ、自作農維持政策が実施されたことをのべている。

といった記述が見られる。この頃から、農業に魅力を失った地主の中に小作人等に土地を売る者の数が増え始める（小作人の自作農化）。

8 少々補足しておく、謙介が鶏に餌をやる場面については、『山崎延吉全集第五巻』『農民道』には、

農業は愛に終始すべき職業である、作物の栽培、動物の飼育、共に愛を以てするに非ざれば、其の極致を見る事が出来ぬ。学理を弁へず、其の応用に愚なるものと雖も、真に土地を愛し、作物を愛し、動物を愛するものは、所謂痒きを搔くが如き親切を尽くすことが出来、育たぬものも育ち、弱きも強くなすことが出来るのは、精農家に於て常に見らるゝ通りである。病虫害の駆除予防に冷淡であり、面倒臭い、厄介なりと、力を惜んで相手を愛する能はざるものは、必ず收穫の土壌に背負投げを喰ふ連中である。

といった記述が見られる。この段落は、この後の、利益を追求する「抜

け目のない」百姓五助の忠告への布石でもあろう。謙介の農業についての考えには、「土を打つ、大地のおいが立つ、種を下す、芽を出す、伸びて行く、花を開く、実を結ぶ、そして收穫！その時々喜びが、謙介の喜びであつた。」といった一節があるが、同じく『山崎延吉全集第五巻』「土と人生」には、

よしあしの区別は兎に角、土には一種の嗅みがある。生産力の高い土ほど嗅みが高い。嗅のはげしい土ほど物が育つといふのである。（略）されば土の嗅は、生活力、生命の力の高調を意味し、生命の増加を物語り、同時に生産力の増加を示すものと思ふべきである。（略）

不嗅の地は耕さざる所であり、土嗅の少ない所である。耕す事によりて所謂風化し、風化するにつれて土嗅を増す。施肥せざる瘠土には物が育たず、育たぬ瘠土には土臭が少い。故に耕耘と肥培とは、単に作付する作物や、播種する物ばかりを目的とするに非ず、土中微生物の繁殖を盛にし、其活動を促進する方便とせねばならぬのである。

土嗅は農地の誇であり、価値であり、作物繁茂の原動力である。されば、農に生きんものは、努めて土嗅を上げしめねばならず、土嗅を歓迎せねばならぬものである。世には土嗅しとて恥ずる者あり、土嗅の人と罵られて悲しむものあり、土に触れるを嫌ふものもあるが、分らぬ人であり、無智の人であるとす。農民に斯る人のあるこそ、全く恥辱であり、悲しむべきであり、悪むべきである。

という記述が見られ、土の臭いの歓迎と高い生産力、理想的な農民がセツトで語られている。また、「謙介は自分が何にかよくないことを云つ

たことに気が付いた。(略) たゞ彼は、売りものには花を飾るべきであると云ふことを知らなかつた。妹と縁談があると云ふそれだけのことに、もう兄弟でもあるかのやうな親しみをその人に持つて居た。」とあることについては、『山崎延吉全集第五巻』『農民道』に、

また農業は質実であり、修飾を要せぬものである。出来たまゝを市場に出し収種物其のまゝ売るが故に、レットルでよく見せたり、模様や綾で綺麗に見せかけることはしないのが常である。大根の首が青いとて白粉を塗つて市場に出したり、人参の色が薄いとて、紅を塗つて売つた例はない。故に農民は比較的質素であり、質実であるとされて居るが之亦業務の感化も少からぬと見るべきである。

といった記述が見られる。第二章の「だが彼には底意深く人を疑ふことは出来なかつた。彼の大患が、彼の心からさうした部分を奪ひ去つて、彼を片輪にして終つて居たから。」は、この「売りものには花を飾るべきである」と云ふことを知らなかつた。」に呼応しており、この縁談を破談にしてきた本当の理由(「シユピツツエン」が理由という「底意」(本心)が分からないということについても、「白痴者」謙介の非常識の裏返しとしての純粋さ、屈託の無さが読み取れると言える。

9 貞子が、謙介が廃人でありながらもラテン語などがでてくることに「不

気味さを感じ」とあるが、国木田独步「春の鳥」等、「白痴者」が、「不気味」と形容されることは多い。「田舎」の人にとつて、ラテン語等の(「エリート」の部分)は、その人が「白痴」であるなしかかわらず「不気味」なものだ、といった反論もあり得るかもしれないが、当の貞子が「都会」に嫁に行つた者であることを考えると、その様には考えにくいであろう。

10 「(カッ)」は、言語でもつて実際に頭の中で思つたことを表していると考えられる。「(カッ)」が本文で用いられているのは、ここを含めて二箇所だけで、もう一箇所は、第二章で謙介が妹に対し「恒ちやん、屈辱を感じるのではないよ。億病では駄目。好奇心は、かう云ふ時に利用するものなんだよ。(略)だがそんなものは、乗越して終ふんだよ。」と心の中で忠告するところで用いられている。しかし、ここで問題になるのは、後者での力点が、「忙はしない彼の訪問は、妹からうるさがられた。」と合わせて、「彼は妹の前では何一つ云へなかつた。」にあることであろう。これは、一章で謙介の母親が「これが一人前であつて呉れたら！」と、貞子に対し「眼」が「さう語つて」いたのとは対照的だ。「(カッ)」内の言葉は、直接、口にされた言葉ではないにもかかわらず、謙介の母親と貞子の間では通じ、謙介と恒子の間では通じない(この通じない、つまり(理解不能)であることは、小説の最後「何? 兄さん、おかしな兄さん!」まで一貫している)。この書き分けは謙介が「知的障害者」としての「白痴者」であることを示していると考ええてよいであろう。

一

謙介は道一つ隔てた野菜畑で、余念なく茄子に肥料をかけて居た。そこへ妹の恒子は出て来た。

「兄さん！ お客さまよ、」

さう告げながら、彼の女は却つて兄の方に近寄つて来て、茄子や胡瓜のうねの中を横に歩いて居た。

「お客？」つと、謙介は顔を挙げた。「お客つて、またあの五助の爺ぢやない？」

丁度その時、恒子は胡瓜の前に立つて居た。

「兄さん、これもいでもい？」

恒子は初生りの胡瓜を手にして、兄の傍にやつて来た。

「五助の爺と来たら、あれはいけないね。自分が百姓のくせに、俺のことを、こゝで葱やへいろく、芋を作るなんて、馬鹿だと云ふんだからね。あいつこそ余つ程おかしいよ。」

恒子はちつと兄の様子を視た。兄は、盲縞の野良着を纏ひ古ズボンを穿いて、手にはむさいものゝ柄杓を握つて居る。そして、無智な、貧しい百姓爺を相手として、真面目に文句を並らべ立てゝ居る。だが、兄は優等の成績で、医科大学を三年まで進んで行つたのである。そこで彼は運命的な、重い脳病に犯された。今、その頃の彼の同窓には、博士がある、大学の助教授があ

る。時折彼はさうした人々の噂をする。連れられて、彼が田舎に帰つて来た頃の情態は、まるで狂人であつた。学問を絶つことは、人間の生活を無くすことのやうに騒いだ。だが歳月はたうとう彼を廃人に落付かせた。そして何時からか彼は自分から進んで鎌を取つて、百姓をし始めた。彼はもう三十四だ。

「兄さん、五助のおやぢさんではないのよ。」

「では誰？」

「C——のお貞さんの、」

「さう？ それならさうと早く云へばいいのに、」謙介は土の上に柄杓を突いて腰を伸ばした。「珍らしい人だね、何だらう？」謙介は、恒子の顔を覗き込むやうにした。

謙介の母は心臓に持病をもつて、此の頃は床の上に寝たり起きたりして居た。謙介が着物を換へて、座敷に入つて行つた時、貞子は彼の女の床近くに坐つて居た。貞子は廃人の従兄を馬鹿にし切つて居た。それでもドイツ語やラテン語まで知つて居る人には、未だどつかに不気味さを感じて居た。彼の女は謙介が近づいた時、座布団を滑つた。

「ご無沙汰いたしました、ずみぶんご精が出ますわねえ、」

謙介はぶざまに一つおじぎをした。貞子は彼より四つ年下であつた。矢張近くの農村で人となつたが、都会の、C——市の商家に嫁いで、平常着のやうにして居る絹ものを、村の人達へのみえとして居た。

「これがねえ、」母は謙介を見据へて、それから貞子を見た。（これが一人前であつて呉れたら！）母の眼はさう語つて居た。それから、「兎に角お前にも、」さう冒頭して母は始めた。貞子は恒子の縁談を持つて来たのであつた。

先方は、医専を出て、その病院で助手をやつて居たが、今度開業するについて妻を迎へようとするのであつた。

「たつたお二人で東京でお暮しになるのですもの、それに、田舎のお家の方にはかなりの財産もありなさるし、私こんないゝ口はめつたにないと思ふのですよ。」貞子は傍から口を添へた。

謙介はいつも何かの相談ごとには自分から身を退けて居た。だがこの時は明るい調子で、熱心に云ひ出した。

「さうだ、恒ちゃんはまだ結婚しなくちやあいけない、ほんとにさうだ。」

だが謙介はたゞ恒子はもう結婚すべきだ、その年齢が来て居ると云ふことだけしか考へて居なかつた。どんな人が選ばれるべきか、それは彼の考への外であつた。漠然と、どこからか妹を愛する若い男が現はれて来るものと信じて居た。それが今、妹の結婚問題が現はれて来た。彼は無邪気に喜んで居た。

だが母は違つて居た。彼の女は先方の血統だとか、資産の状態とか、本人の性質などか云ふことを、細く頭の中に入れて居た。それだけ、それ等のことがはつきりしない今、はか／＼しい言葉が云はれないで居た。

「先方では、恒子さんにお遊びながら、C——に来て貰へるとほんとにいゝと云つて居るのですが、それもなんでしたら来週の日曜あたり、本人をこちらに――案内いたしませんかねえ、お母さん？」

「さうですね、——」

「あの、恒子は、」謙介は不意に言葉を挟んだ。「どうもシユピッツエンが悪るくはないかと思はれるんです。一度C——病院に診せにやらうと思つて居たところなんですから、それながらこつちから出るやうにしたらいいでせう。」

「それならほんたうに好都合なのですが、恒子さんどつかお悪いんですか？」

「シユピッツエンが、え、肺炎ですよ、ほんの少しだとは思ふんですが。」

その時母の眼が謙介の方に動いた。彼の女の顔には深い困惑が浮んで居た。彼の女は息子の病氣と、不必要な言葉とから、二重に悩んで居た。

「さつきもご覧でしたせう、恒子はあんなに元気なのですもの、どこが悪るいのですか、ほんとにこれなぞ何にも解りもしないくせに、困つて終ふのですよ。」

謙介は自分がかよくないことを云つたことに気が付いた。自分を目の前に置いて、こんな風に云はれるのは、心に触れないでは居られなかつた。

だがそれにも今は慣れて、また自分から諦らめても居た。だゞ彼は、売りのには花を飾るべきであると云ふことを知らなかつた。妹と縁談があると云ふそれだけのことに、もう兄弟でもあるかのやうな親しみをその人に持つて居た。

「それよりも、これがこんな風なものですから、恒子を外に出して終ひましては、後がどうかと考へられましてね。」母はまた始めた。「恒子さんをお出しになれば、一時はお困りかも知れませんが、それはまたどうにでもなりませう。あんまりいゝ口なものですから、他人にやるのは惜しくなりませんですもの。」

「このところに来て呉れる者があるやうだと、ほんとにいいのですが、」謙介は自分が氣拙い位置におかれて居るのを感じて、憶病になつて黙つて終つて居た。そして、それだけ心の裡では独りで考へて居た。自分は病氣をしてから、ほんたうに駄目になつて終つた。でも自分は、自分だけでは、この人生の中核だけは解つて居るやうに思はれる。たゞそれを包んで居る、いろ／＼な、複雑でわづらはしいことは、どうも自分にはうまく行かないだけなんだ。それまでが周囲の人達に否定されて居るやうに思はれるのが、ほん

たうに淋しい。でも自分にもきつと妻が来て呉れるやうに思はれる。その人はほんたうに利口な人なのだ。よく、自分も解つて居るところがあると云ふことを、ちあんと解つて呉れるんだ。そんな人がきつとどつかに居て、その中きつと来て呉れる。――

「お母さん、私のところに来てくれる人、あるかも知れませんか。」さう謙介は口に出して終つた。母は彼の方を振返つて笑ひ顔で貞子と見合ひあつた。

二

貞子が若い医師を連れて来ると云ふ日の朝、謙介は落付いて居られないで、何時もよりずつと早く床を離れた。彼は真先きに鶏の世話に取りかゝつた。鶏は、彼に取つては、卵を産ませる為めの飼ひものではなく、友達であつた。お互の生活の、パートナーであつた。彼はよく子供に見ることが出来るやうな親しみて、鶏を愛した。それで彼の鶏の中には四歳稀れには五歳のものも交つて居た。勿論それ等は彼に極く僅かしか卵を与へなかつた。

そはくゝと朝の用事を済すと、謙介は座敷に上つて、時計を見た。それは未だ漸く七時を過ぎたばかりのところであつた。今度は彼は恒子のところに出掛けて行つた。忙はしない彼の訪問は、妹からうさぎがられた。彼には、見合と云ふことは、華かなことではなくて、淋しさを感ずるものであつた。彼は妹をいたはり、慰さめようとする心持を抱いて、妹のところへ赴いて居た。(恒ちゃん、屈辱を感じるのではないよ。憶病では駄目。好奇心は、かう云ふ時に利用するものなんだよ。警戒、警戒！ そんなものがお互を取囲んで居る。だがそんなものは、乗越して終ふんだよ。) 彼は妹の前では何一つ云へなかつた。自分の部屋の中に独りになると、心の中で一生懸命に妹に

忠告して居た。

午後になつても未だ貞子等が姿を見せないと、謙介は一人でいらゝんとして居た。汽車が村の駅に着く度毎に、一々表の道まで出て行つて、立つて居た。

丁度さうした最中に、五助の爺はやつて来た。彼は他人の家に來客があつて、御馳走がありさうな時に、どこからかそのにほひを嗅ぎつけて、出掛けて行くことに妙を得て居た。そんな時機嫌がいらゝやうに、今日もよかつた。そしてまた始めた。

「兄さん、前の畑は貸したがいゝね。さうだつて。おめえよく考へて見るがいゝ。おめえがあん畑に火箸棒見てえな葱や猫の金玉くれえな茄子を作つたつて、一年いくらのもんがあると思ふかね。あれを坪七銭で貸して見るがいゝ。樂をして居て、好きがゝりなセン菜工が買へて、余つてけるぢやねえか。坪七百、つて、お前、月だよ。」

五助は抜け目のない中年の百姓であつた。口前も非常によかつた。今日もその通りであつた。だが謙介は、今待つ人を持つて居るばかりではなく、五助の話に余り惹き入れられなかつた。彼の心の中には寧ろ五助の話には、反感を感ずるそくはないものがあつた。彼は土地からは生命の出で来るのを喜んで居た。土を打つ、大地のにほひが立つ、種を下す、芽を出す、伸びて行く、花を開く、実を結ぶ、そして收穫！その時々喜びが、謙介の飲みびであつた。五助はより大きい胡桃を呉れようとして居る。彼には五助の云ふ計算のことは解つて居た。だが五助が呉れようとする大きい胡桃からは、既に柔かい実が剥抜かれて終つて居るやうに思はれてならなかつた。謙介は一本気に、土の中にある不思議な力のことばかり考へて居た。

「ゆつくり話していくがいゝ、謙介はそこに来て居た妹に五助を残して、

自分の部屋に入つて終つた。茶の間からたつた襖一重の部屋で、彼は縁に出て、呑気さうに鶏を呼び集めたり、かと思ふと、「どうしたのだらう、もう来さうなものだね！」と不意に妹に言葉をかけて来たりした。

三時を過ぎて也未だ約束の人達は来なかつた。その時にはもう謙介はすっかり諦めて居た。

「何にか、きつと不意の用事が出来たんですね、」彼は母や妹の前で何度も繰返した。だがふと独語して云つて居た。

「どうして来なかつたらう？」

それから六日目の朝、謙介はやうやく貞子の許から一通の手紙を受取つた。それには簡単に、年廻りが悪いと云ふことで、先方から中止の依頼があつたからと、書いてあつた。謙介は読終へると、そつとそれを自分の袂の中に入れて終つた。さもそれでそのことが母や妹に知らさずに片付いて終ふと思つて居るかのやうに。そしてすぐと急いで畑へ出て行つた。彼は淋しい、そして不愉快な心持につゝまれて居た。だが彼には底意深く人を疑ふことは出来なかつた。彼の大患が、彼の心からさうした部分を奪ひ去つて、彼を片輪にして終つて居たから。

その日は上天気であつた。太陽は機嫌よく照つて、鷹揚に光を漲らして居た。六月の、成熟した木々の青葉や、また黒い土は、放恣にその光を接吻して居た。謙介もその光りを浴びながら、夢中になつて胡瓜にポルドー液¹を灌ぎ出した。

ふと彼は、危く、また呑気に言葉をかけようとした。すぐ前の道を、貞子が若い男と連れ立つて歩いて居た。謙介は二人が自分の家へ入つて行くのではないかと、息を殺して居た。だが彼等は謙介の家の前を、まるで見知ら

ぬ家のやうにして通り過ぎて行つた。謙介は思はず道まで出て行つて、のつそりと道端に立つた。二人は、それも貞子の遠い親戚で、そこにも若い娘のある、彼の家から四軒目の、大きい家の庭へと曲つて行つた。連れ立つて行く若い男の麦藁帽は、真新らしくあつた。そして柔らか味のある、薄色の洋服。青年紳士は歩く時、軽快にステツキを振つて行つた。どつか、若い王子が彼の王妃を田舎娘の間に取りに行くやうであつた。そして彼の二歩前には、貞子が、この人生の道案内のやうにして、歩いて居た。——謙介は急いで裏門から自分の家へと入つて行つた。母の部屋の前の障子は完全に閉つて居た。謙介は台所の土間に立つて妹を呼んだ。

「何、兄さん？」恒子の無邪気な、平和な顔が納戸から現はれて来た。彼は安堵した。

「何？兄さん、おかしな兄さん！」

「何、なんでもないんだよ、……」謙介は何がなしに狼狽へて居た。そしてだしぬけに呟いた。「あいつ等は馬鹿なんだよ！」

謙介はよく常人のことを馬鹿だと云つた、丁度狂人が常人のことを狂人だと云ふやうに。(二五、二)

【資料の注記】

1 「重い脳病」については、例えば脇田良吉『異常児教育の実際』には「脳膜炎は死なずとも、脳のおかされやうによつては、成績不良児や中間児位で済まない事があるから、寸時の怠りもないやうに願ひたい」とある。

三宅鉦一『白痴及低能児』にも「白痴低能ノ後天性原因ニハ脳質炎、脳膜炎を主トシ」といつた記述が見られる(『異常児教育の実際』も原因として「脳質炎」を挙げている)。藤岡眞一郎『促進学級の実際的研究』も

脳病で「白痴」の原因となるものについては「脳膜炎」を挙げている。文学作品では、島崎藤村『家』に、「脳膜炎」が「白痴」の原因として描かれている。『山崎延吉全集 第五巻』には、「農村の疲弊、農家の困窮を訴ふる前に、農民は須らく自己反省をなし、農業に落付き、農村に安住する道を講究せねばならぬのである。月給取はよい様であるが、果して安全な地位であらうかを、考へて見れば直ぐ分ることである。都市に出て成名成功の人は確にある、而も多くの犠牲者が存在する事は、調べれば明瞭な事実である。」といった記述が見られるが、謙介の「脳病」を都会中心主義、出世主義の犠牲（ストレス等が原因）として読み得るかどうかについては断定はしかねる。石井充「子を失ふ百姓」には、都会に出てきた百姓「彌平」について、「彌平はたまに見る都会の賑かき、華かきを見返り勝ちであつた。彼には都会の空氣こそ爽に、そして空は田舎のそれよりも一層高いやうに感じられた。たゞそれは彼に喜悦を与へないで、圧迫を、反感を与へるのであつた。」と語る一節がある。

2 「シユピツツエン」とは「Spitzen」（独）で、（先端）等の意。この場合、文脈から、「Spitzenkranke」（肺炎カタル）の意のことと考えられる。通俗衛生普及会編『最新家庭医学大鑑』（第二版 大正六年六月）の「呼吸器疾患」には、「結核と云へばア、肺病のことだなあと素人までも知つて居る位のもので（略）肺尖加答兒、肺浸潤など云ふのは、此肺病の初期のこと」とある。「肺炎」といふのは大きなカテゴリーで、原因によりいくつかに細分化できるが、結核菌を原因とする「結核性肺炎」はその一つ。ちなみに、「ドイツ語の〈肺炎〉は「Lungenzandung」が一般的か。藤岡眞一郎『促進学級の実際研究』では、「呼吸器病」「肺炎」を、「劣

等児及低能児」の遺伝的な原因として挙げている。

謙介の母は、その反応から、「シユピツツエン」の意味が（肺結核の初期の状態）であることを知っていると考えられるが、謙介の母が知っているか否かはさして問題ではない。貞子がその意味を解したかどうかは分かり得ないが（まず分からなかつたと考えてよいだろうが、謙介が「肺炎」と言い換えるので、「肺炎」であることだけは分かつたであろう。しかし、ここで問題になるのは、貞子もつてきた恒子の縁談の相手が「医専を出」た、病院を「今度開業する」医者である、ということだ。当時にあつては、妻が肺結核を患つていてというだけでも結婚の条件としてはよくないであろう。加えて、健介の母が気にしたように、「血統」といった要素を若い医師が気にするならば、「白痴」の子を産む可能性の考えられる「肺炎」の恒子は、二重の意味で結婚の条件としてはよくないであろう（当時の教育学、とりわけ「低能児教育」は、医学と密接につながつてゐる）。

3 「坪七百」は、直後の「口前も非常によかつた」から、「坪七錢」の誇張と考えられる。

4 胡瓜や南瓜等の瓜類がやられ易い病はベト病。佐藤総右衛門「茄子と胡瓜」（大正十一年 有隣堂書店）によると、ベト病は葉が枯死、腐敗する病で、「被害は下葉に初まり漸々上葉に及び甚しきに至れば悉く黄枯せしめ顆を結ぶも成長せず且つ形状不正となつて其質硬くなるものである。」「発病前凡そ二週間前より二斗式又は二斗五升式ボルドウ液を二週間隔位に二三回葉面に散布すればよいのである。」とある。

（九州大学大学院人文科学府博士後期課程二年）